

リムスキー＝コルサコフ『我が音楽生活の年代記』 ～翻訳の試み（2）～

高 橋 健一郎

『文化と言語』第 78 号に発表したリムスキー＝コルサコフ著『我が音楽生活の年代記』の翻訳の続きである。今号では第 5 章と第 6 章を訳出する。

リムスキー＝コルサコフや原著については、前号を参照されたい。また、前号と同様、ロシア音楽史において特に重要と思われる音楽家や作品を中心に訳者が注を付し、それは訳文中に〔 〕の形で入れるか、あるいは脚注の形で入れている。本稿の注は基本的には訳者によるものだが、底本とした著書に付されている注を参照したときには、その旨を記している。

第5章 1862—1865年

外国航海。イギリスとリバヴァ港への航海。S.S. レソフスキー海軍少将。アメリカへの航海。アメリカ合衆国滞在。太平洋への航海の任務。P.A. ゼレノイ船長。ニューヨークからリオデジャネイロへ、そしてヨーロッパへ帰還。

われわれはキールに向けて出発し、そこに3日ほど滞在し¹、そこからイギリスのグレーヴゼンドに向かった。海に出てから、クリッパー船のマストが短いことが分かり、それでイギリスで新しいマストを注文し、艀装し直すことになり、実際イギリスに着いてすぐにそうされた。この作業のため、イギリス（グレーヴゼンドとグリーンハイス）で4か月ほど足止めを食らった。わたしは二度ほど仲間と一緒にロンドンに行き、そこでウェストミンスター寺院やロンドン塔、水晶宮などいろいろな名所を見て回った。コヴェント・ガーデン劇場〔ロイヤル・オペラ・ハウス〕のオペラにも行ったが、何をやっていたかは覚えていない。

クリッパー船にはわれわれ卒業年度の同じ海軍士官候補生が4人、そして海軍准士官の舵手と機械技師が数人いた。われわれは小さな船室一室に入れられ、士官の共同部屋には入室を許されていなかった。われわれ士官候補生には責任を伴うような大きな任務は与えられていなかった。当直の士官の補助として、順番に当直に立った。そのほかは自由時間が十分にあった。クリッパー船には立派な図書館があり、われわれはかなりたくさん読んだ。時には活発な会話や議論が行われることもあった。60年代の風潮にわれわれも影響を受けていたのである。われわれの中には進歩主義者と保守反動家がいた。前者の代表は P.A. モルドヴィンで、後者の代表は A.Ia. バフテヤロフである。よく読まれていたのは 60年代に大流行していたバックル、そしてマコーリー、

1 底本の注釈によると、これはリムスキー＝コルサコフの間違いで、キールでの停泊は2-3週間続いたという。

スチュアート・ミル、ベリンスキー、ドブロリューボフなどである。散文小説も読まれていた。モルドヴィンはイギリスで英語とフランス語の本を大量に買っていたが、その中には革命と文明のありとあらゆる読み物があった。だから、議論のネタが尽きなかったのだ。この時代はゲルツェン、オガリョフそして彼らの『鐘』²の時代である。この『鐘』も購読されていた。そういう時にポーランド蜂起³が始まったのだった。モルドヴィンがポーランド人に同情を示したため、モルドヴィンとバフテヤロフの間は口論にまで発展した。それでも、わたしが完全に共感を抱いていたのはモルドヴィンの方である。バフテヤロフはカトコフの虜になっており、あまり共感できなかった。そしてバフテヤロフの主張もわたしは気に入らなかったのだ。モルドヴィンは熱烈な農奴制擁護の地主、貴族であり、上流階級特有の傲慢さがあった。

母や兄とのほか、バラキレフとも手紙のやりとりをしていた。わたしはバラキレフにもし可能であれば交響曲のアンダンテの楽章を書くよう勧められた。そこでバラキレフからもらったロシアの主題《タタールの捕虜について》を使ってとりかかった。この主題はバラキレフがヤクシュキンから伝え聞いたものである。イギリスに停泊中わたしはこのアンダンテの楽章を書きあげることができ、そしてスコアをバラキレフに郵送した。わたしはこの楽章をピアノを使わずに（ピアノがなかったのだ）書いた。たしか二度ほど、岸辺のレストランで、作曲した部分をピアノで弾くことができた。バラキレフはアンダンテの楽章を受け取ると、ペテルブルグのグループのみんなこの作品が交響曲の最良の楽章だと認め、満足していると返事をくれた。それでもいくつか変更するよう書面で提示してくれ、わたしはそれに従った。

2 ゲルツェンとオガリョフによってロンドンとジュネーブで刊行された隔週刊紙。専制政治と農奴制に反対した初の革命的新聞と言われる。

3 一般に「1月蜂起」または「1863年蜂起」と呼ばれるこの蜂起は、旧ポーランド・リトアニア共和国領で発生したロシア帝国に対する武装蜂起。1863年1月22日に始まり、1864年4月11日に終結した。

ロンドンで小さなオルガンを買った。自分と仲間たちの楽しみのために可能な限り弾いた。

1863年2月末、艀装のやり直しが終わると、クリッパー船《アルマーズ号》は突然新しい任務を与えられた。ポーランドの蜂起に火がつき、ポーランド人のために外国からリバヴァ港に武器が持ち込まれているという知らせが届いたのである。クリッパー船はバルト海に戻り、リバヴァ港を偵察しながら巡航し、武器がポーランドに持ち込まれたり渡されたりしないよう見張らなければならなかった。姉妹関係にあるにもかかわらずロシアによって抑圧されている近縁の独立したポーランド民族がこの自由の大義をかざすのは、われわれには正しいと思われたし、それに対してわれわれ士官候補生の船員の中にはひそかに心の中でシンパシーを感じている者もいたのだが、上司の命によって否応なしにわれわれは誠心誠意ロシアに奉仕するため出発しなければならなかった。霧のイギリスに別れを告げ、クリッパー船はリバヴァに向かった。北海を渡る際にかなりひどい時化に遭ったのを覚えている。揺れがひどく、2日間温かい料理を作ることができなかった。しかしわたしはまったく酔わなかった。

われわれはリバヴァ港に約4カ月間停泊し、その間石炭や食料を積みにリバヴァやパラंगाに立ち寄りたりした。われわれの巡航は、蜂起を起こすポーランド人に武器や軍需品を渡そうとする者たちを脅したという意味で、もしかしたら功を奏したのかもしれない。しかしわれわれはある程度近くで怪しい船を一隻も見ることがなかった。あるとき遠くにどこかの汽船の煙が見えたことがあり、全速力でそこに向かったが、汽船はすぐに視界から消え、われわれはそれが敵の船なのか偶然通り過ぎた汽船なのか、断定はできなかった。リバヴァ近くの巡航は退屈だった。だいたいいつも天気が悪く、風も強かったのだ。リバヴァには何も面白いものがなく、パラंगाはもっとそうだった。パラंगाで陸に上がる時には、たまに気晴らしのために乗馬をやってみたりもした。そうしている間に、わたしは音楽をしたいという気持ちが薄れ始め、本の虜になっていた。

6月か7月にわれらのクリッパー船はクロンシュタットに呼び戻された。この帰還の目的はわれわれには知らされなかった。クロンシュタットに着き、錨地に3日ほど停泊するとまた、レソフスキー提督の大艦隊の一員として航海に出された。共に航海に出たのは、フリゲート艦《アレクサンドル・ネフスキー号》、コルベット艦《ヴィーチャズィ号》と《ヴァリヤグ号》そしてクリッパー船《ジェムチューグ号》である⁴。提督は《アレクサンドル・ネフスキー号》に乗っていた。クロンシュタットにいる間、わたしはペテルブルグとパヴロフスクに行くことができた。ゴロヴィン家とノヴィコフ家の人たちが別荘に滞在していたのである。わたしの母と兄の家族、そしてバラキレフとキューイー、その他知人たちはそのとき夏休みでペテルブルグにはいなかった。パヴロフスクでは当時ヨハン・シュトラウスが指揮をしていて、《マドリードの夜》〔ミハイル・グリムカ作曲の管弦楽曲〕を聴くことができた。心から満喫したのを覚えている。

海に出た後は、艦隊の船はバラバラになり、それぞれ別個に出発した。われわれがニューヨークに向かい、そこで艦隊の他の船と合流すること、そしてわれわれの出航の目的が純粋に軍事的なものであることを知ったのは、海に出てからだ。ポーランド蜂起が引き金となってイギリスと戦争が始まるのではないかとされており、実際に戦争が起こった場合には、われわれの艦隊はイギリスの船を大西洋で威嚇することになっていた。われわれはイギリス人に見つからないままアメリカに到着しなければならなかったため、航路はイギリス北部に向かっていった。というのは、このように迂回することで、イギリスからニューヨークへの普通の航路を避け、まったく他の船に遭遇することのない航路を進むことができたからである。途中で石炭を積むために2

4 底本の注によれば、大艦隊を構成していた船としてここで列挙されているリストは間違っている。正しくは、フリゲート艦《アレクサンドル・ネフスキー号》と《ペレスヴェート号》、コルベット艦《ヴァリヤグ号》と《ヴィーチャズィ号》、そしてクリッパー船《アルマーズ号》であり、《ジェムチューグ号》はこのときの艦隊には含まれていなかった。

日ほどキールに立ち寄ったが、そのときも航海の目的を厳重に秘密にしたままだった。キールからは途中停泊なしでイギリス北部を迂回し、ニューヨークまで行くことになっていた。これだけ長い航海だと石炭が足りなくなるので、大部分は帆を揚げて航海しなければならなかった。上記のような迂回の航路での航海は 67 日間続いた。イギリス北部を迂回する頃には、どんな船とも出会わなくなった。われらのクリッパー船は、大西洋に入ると、執拗な向かい風に遭い、それは時化の域にまで達することもたびたびであった。帆を全開にしたまま、強い向かい風を受け、われわれは数日の間文字通り前に進まないこともしばしばあった。かなり寒くじめじめした日が続いた。海の巨大な波でクリッパー船がひどく揺れたので、煮炊きができなかったことも多かった。この季節には回転性暴風（嵐）がアンティル海〔カリブ海〕から北米の海岸に沿って進み、イギリスの海岸の方に向かって海を横切って曲がっていくのだが、その進路を横切るように進んでいたわれわれは、ある日そのような嵐の一つの輪の中に入り込んでしまっていることに気付いた。気圧計の急降下と大気の蒸し暑さによって、嵐が近いことがわかる。風はますます強くなり、そして左手から右手へと方向をつねに変化させている。巨大なうねりが生じた。われわれは小さな帆一本で進んでいた。夜中になり、稲妻が見えた。ひどい揺れだ。朝方になって気圧計が上がり、嵐が遠ざかることを示した。われわれは嵐の中心から近いところで右半分を通過したのだった。事なきを得た。しかし強烈な嵐に煩わされたのはそれが最後ではなかった。

アメリカの海岸の近くでわれわれは暖流のメキシコ湾流を横断した。朝に甲板に出て、海の色がまったく変わっているのを見て驚きそして喜んだのを覚えている。海は灰緑色からこの上なく美しい濃青色になっていたのだ。冷たく突き刺すような風からうってかわって+18 度⁵になり、陽が差し、素晴らしい天気だった。トビウオが次から次へと海面から跳びあがり、まるで熱帯にいるかのようなようだった。夜中に海は豪華な燐光を発した。次の日も同様だ。

⁵ リムスキー＝コルサコフはこれ以後、気温の単位を「°R」と記しているが、おそらく「°C」の誤りと思われる。本訳稿では「度」と記す。

海中に温度計を下ろすと、+18度。3日目の朝、メキシコ湾流に入ると、また変わった。灰色の空に冷たい空気、海の色は灰緑色、水温は3度か4度、そしてトビウオはいなくなった。クリッパー船はメキシコ湾流と並行する新しい寒流に入った。航路を南西、ニューヨークに向かってとると、ほどなくして商船とすれ違うようになった。

10月、何日だったかは覚えていないが、アメリカの海岸が見えた。われわれは水先人を要求し、ほどなくハドソン川に入り、ニューヨークで投錨した。そこには艦隊の他の船もいた。アメリカ合衆国には1863年10月から1864年4月まで滞在した。ニューヨーク以外に、アナポリスやボルティモアにも滞在した。チェサピーク湾からワシントンを見に行ってきたりもした。アナポリス滞在時にはかなり冷え込み（[マイナス]15度まで）、われらのクリッパー船とコルベット艦《ヴァリャーグ号》が停泊していた川は凍った。氷はとても堅く、われわれはその上を歩いてみたほどだったが、それは2-3日しか続かず、その後川は割れてしまった。

ニューヨークからわれわれ士官候補生と士官たちは、ナイアガラに行くことになった。まずハドソン川を通過して汽船でオールバニまで行き、そこから鉄道で行った。ハドソン川の両岸はとても美しく、ナイアガラの滝は本当に印象深かった。これはたしか11月だったと思う。木々の葉はいろいろな色に染まり、天気も素晴らしかった。われわれは岩場を見て回り、カナダ側から可能なところまで滝の下へと歩いていき、ボートでできるだけ滝の近くに近づいた。いろいろなところ、特にテラピントワーから見た滝の印象は、譬えようもないものだった。このタワーは滝の落ちはじめの岩場に建てられていて、そこに行くには、滝をアメリカ滝とカナダ滝（馬の蹄鉄の形）に二分するゴート島から架かっている軽い橋を通過して行く。滝の唸る音は言葉では言い表せないほどのもので、何マイルも先まで聞こえる。アメリカ人たちは自腹でナイアガラにわれわれを連れて行ってくれたのだった。大西洋を挟んだロシアの友人たちへのおもてなしということだ。われわれにあてがわれたホテルも立派だった。この旅行には艦隊の士官と士官候補生全員が二班に

分かれて参加した。われわれの班にはレソフスキー提督も参加していた。ナイアガラのホテルでは、みんなを楽しませるためにわたしはピアノを弾かされた。わたしはもちろん嫌がって自分の部屋に戻り、ドアの外にブーツを立てて、寝たふりをしたのだが、しかしドアの外から誰かがレソフスキーの命令を伝えてきたため、わたしは服を着て、サロンに出て行かなければならなかった。ピアノに向かい、たしか《皇帝に捧げた命》のクラコヴィヤクとさらに何曲か演奏した。すぐにわたしは、誰も演奏を聴いておらず、わたしの音楽をBGMにしておしゃべりに興じていることに気付いた。それでこっそりと演奏をやめ、寝に帰った。次の晩はもう弾けと言われなかった。そもそも誰もわたしの演奏など必要としていなかったし、最初の晩に必要なのは、単にレソフスキーの気まぐれに応えるためだけであり、そのレソフスキーにしても音楽のことは皆目わからず、まったく好きでもなかったのである。ついでにレソフスキーについて記しておこう。レソフスキーは有名な船乗りで、かつて日本で地震により大破したフリゲート艦《ディアナ号》の艦長だったこともある。とても激昂しやすく奔放な性格で、あるときなど怒りのあまり、何か悪さをした船員に駆け寄って、鼻をかじり取ったこともある。そのことで後に、その船員が年金をもらえるよう動いたという話だが。

ナイアガラに2日滞在し、そしてニューヨークに戻った。帰路はエルマイラを通る別のルートで、エリー湖とオンタリオ湖が望める道のりだった。クリッパー船は再びニューヨークで円材を取り換えた。イギリスで作られたばかりのあの円材をである。北アメリカで過ごした7か月のうち、はじめの3か月か4か月はニューヨークに停泊したが、その後は、すでに触れたとおりチェサピーク湾、アナポリス、ボルティモアへと航海した。そして最後の数か月はまたニューヨークに滞在となった。予想されていたイギリスとの戦争は起こらず、われわれは大西洋でイギリス商船を拿捕したり、威嚇したりする必要はなかった。われわれがチェサピーク湾にいる間に、フリゲート艦《アレクサンドル・ネフスキー号》とコルベット艦《ヴィーチャズィ号》はハバナに行ってきた。

北アメリカの滞在の終わりごろ、大艦隊全体がニューヨークに集結した。われわれが合衆国に居る間中、アメリカ人たちは奴隷制の問題をめぐって北部と南部の諸州の間で内戦を行っており、われわれは事態の進展を興味深く見守っていた。われわれ自身はリンカーンが大統領を務め、黒人の解放を標榜する北部州の側に完全に立っていた。

われわれはアメリカ滞在中何をして時を過ごしていたのか。作業の監視、当直、大量の読書、そして陸への適当な旅行——これらが繰り返されていた。陸に上がり、新しい場所に行くと、普通何か観光名所を見学し、それからレストランを回り、そこで食事をしたり、ときには飲んだりもした。どんちゃん騒ぎはしなかったが、ワインを飲みすぎることはしばしばだった。そういう場合はわたしも、けっして特にというわけではないものの、他の者たちに引けは取らなかった。あるとき、士官候補生の共同部屋のみんが座って手紙を書き始めたことがあった。誰かがワインを1本頼み、「頭がはたらくように」と言いながらすぐにみんなで1本空け、2本目、3本目と続いた。手紙を書くのを中断し、ほどなくみんなで陸に上がり、そこで酒宴が続いたのを覚えている。ときにはそういう酒宴の終わりに女性を買いに行ったりすることもあった……。下品で汚らわしい……。

ニューヨークでわたしはマイヤベーアの《悪魔のロベール》とグノーの《ファウスト》を聴いたが、演奏はかなりまずかった。自分自身では音楽はまったくやらなかった。ただ、時々士官候補生の共同部屋の余興で小型オルガンを弾いたり、ヴァイオリンと二重奏をしたりすることがあったくらいだ。ヴァイオリンの演奏はアメリカの水先人 Mr.トムソンである。彼とはいろいろなアメリカの賛歌や歌を演奏したが、そのときにわたしは初めて聞くメロディーにその場ですぐに耳を頼りに伴奏を弾き、彼を大いに驚かしたものだ。

その当時わたしは非常に読書に惹かれた。歴史物や批評、文学作品以外に部分的に興味があったのは、地理、気象学そして旅行記である。アメリカにいる間に英語も少し覚えた。

1864 年春ごろ、イギリスとの戦争はなく、われわれの艦隊が別の任務を命じられるということが明らかになった。実際、ほどなくしてわれわれのクリッパー船はホーン岬を回って太平洋に向かうようにという命を受けた。したがって、われわれは世界一周、つまりさらに 2-3 年航海することになったのである。コルベット艦《ヴァリヤグ号》も同様の任務を受けた。他の船はヨーロッパに戻るはずであった。ゼレノイ船長はなぜか世界一周にまったく乗り気ではなかった。わたしはむしろ嬉しかった。当時自分の音楽熱はほとんどまったく失せてしまっていた。バラキレフにわたしからあまり手紙を書かなかったために、バラキレフからも手紙は滅多に来なくなった。音楽家や作曲家になるという考えは少しずつ消え失せ、かわって遠い国々に惹かれ始めたのである。もっとも海事自体はあまり好きではなく、わたしの性格にも合わなかったが。

4 月にクリッパー船はニューヨークを発ち、ホーン岬に向かった。この季節に合衆国からホーン岬に向かう船は普通次のように航海する。まず偏西風を利用し、東に針路をとってヨーロッパの方に向かい、その後アゾレス諸島のやや手前で南下し、貿易風を背に受けて、できるだけアメリカの海岸から遠く離れたところで赤道を横断する。それは、船は普通ホーン岬を迂回する前にリオデジャネイロやモンテヴィデオに立ち寄るのだが、南半球の南東の貿易風がなるべくそれに都合よく吹くようにするためである。われわれもその通りにした。われわれの航海はニューヨークからリオデジャネイロまで帆を揚げて 65 日間かかった。これだけかかったのは、第一にクリッパー船《アルマーズ号》がイギリスとニューヨークで二度にわたってマストを交換したにもかかわらず、十分に速度が出なかったこと、そして第二にゼレノイ船長がやや臆病な船乗りで、疑い深い人だったことによる。ゼレノイは当直の士官たちと上級士官の L.V.ミハイロフのことをまったく信用していなかった。彼らのはつねに小さな帆を揚げていなければならず、風が少しでも強まると帆は下げられるのであった。すれ違う商船が帆を全開にして走行していても、われわれはその真似をせず、ゆっくりと進んだ。航行の際、ゼレノイは昼間は

ずっと自分で船に指示を出しながら甲板で過ごし、夜中は服を着たまま自分の船室の階段に座ってうとうとし、騒ぎがあればすぐに上まで飛び出して行って、指揮に口出ししようとするのだった。指揮官がそのように人を信頼しないので、その結果当直の士官たちは主体性が身につかず、なんでもないことでもいちいち指揮官にお伺いを立て、その指揮官は彼らに何かちょっとでもミスがあると、船員みんなの前で打ちのめし、侮辱するのだった。ゼレノイはがさつで不信の人ということで、士官からも士官候補生からも好かれていなかった。好かれていなかったのは、この人の指揮のもとでは経験を積むことができないとみんな感じていたからでもある。毎週日曜日には船員たち全員をアイコンの前に集めて、たいてい自分で祈祷を読み、その後、上の甲板では、個々の航海で船員に対する自分の権力が無制限に大きいと書かれた海事の規約や法を読み上げるのだった。船員たちを鞭打つのは好まず、それは彼の良いところだったが、しかし殴ったり、下品な言葉で激しく罵ったりすることはあった。

純粹に海の仕事や海事、そこの人々に関する印象はすでにたくさん述べたので、ここで脇に置き、狭い意味での旅行としての航海の印象について述べることにしよう。この印象はまったく別の種類のものである。

はじめ航海はロシアからニューヨークに向かうときと同じように厳しいものだった。清々しくも荒れた風がヨーロッパの海岸まで続いたのだが、それでも大西洋は今回は春の季節だったためにそれほど陰鬱な感じではなかった。

（アゾレス諸島からほど近いところで）南方に旋回してからは、天候が良くなりはじめ、空はどんどんと水色になり、ますます暖かくなっていき、そしてようやくわれわれは北東貿易風帯に入り、ほどなく北回帰線を横切った。素晴らしい天気、穏やかな暖かい風、わずかに波立つ海、綿雲の浮かぶ紺碧の空——これらすべてが恵み豊かな貿易風帯を通過する間ずっと変わることがなかったのである。昼も夜も本当に素晴らしかった！ 昼間の海の紺碧の魅惑的な色が、夜になると幻想的な燐光へと替わるのである。南下するにつれて黄昏はどんどん短くなり、南の空は新しい星座とともにどんどん開けて

いく。南十字星と天の川の輝きはいかばかりか。カノーブス（アルゴ船座⁶）やケンタウルス座の星の素晴らしいことよ。そして、ロシアでは夏の明るい夜に青白く見える（さそり座の）アンタレスが、ここではなんと明るく赤く光っているのだ。また、ロシアでは冬の夜に見られる有名なシリウスが、ここでは二倍大きく、明るく見えた。ほどなく、両半球のすべての星が見えるようになった。大熊座が水平線上の低いところに見え、南十字星はどんどん高く昇って行く。綿雲の中に隠れている月の光は満月の時には眩いばかりだ。燐光を放つ紺青の熱帯の海は素晴らしく、熱帯の太陽と雲も素晴らしく、海の上の夜の熱帯の空はこの世で一番魅惑的である。

赤道に近づくにつれて、昼と夜の気温の差はだんだん小さくなっていった。昼間は（もちろん日陰で）24度、夜は23度である。水温も24度か23度であった。わたしは暑さを感じなかった。気持ちの良い貿易風が何か暖かみを帯びた涼しさを感じさせてくれるのだ。夜の船室はもちろん蒸し暑かったので、わたしは夜の当直が好きだった。外の良い空気を吸って、空や海を眺めていられたからである。海はサメの危険があったので、泳ぐ代わりに1日に数度水浴びをした。あるときわれわれは船の後ろを泳いでいたサメをずっと目で追ったことがあった。捕まえようとしたが、なぜかうまくいかなかった。クジラが潮を吹いているのがよく見られ、またトビウオが朝から夜中まで船の両側に見られた。その1匹が飛び込んできて、甲板の上に音を立てて落ちたこともあった。

われわれは2日ほどヴェルデ岬のポルトグランデに立ち寄った。陽に焼かれて貧弱な植生、そして石炭が埋蔵されている小さな町のある、岩ばかりの無人島だが、それでもいくらか楽しむことができた。われわれはロバに乗ったのだが、ガイドの黒人の少年がロバを容赦なく棒で突いたり、叩いたりしていた。食料品と石炭を積み込んで、クリッパー船はリオデジャネイロに向かった。無風海域は蒸気力で通過した。天空にはしばしば雲と海とを結ぶ漏

6 アルゴ船座は現在では「帆座」、「艦座」、「羅針盤座」、「竜骨座」の4つに分かれている。カノーブスは現在はその竜骨座の一つ。

斗の形をした竜巻が見られた。赤道を通過するときには、例のネプチューンの行進の祭りと水浴びが行われた。これはあらゆる旅行記に幾度となく記されたお祭りである⁷。

無風海域を通過すると、南東貿易風を受け、再び魅惑の熱帯の天候になった。南回帰線に近づくにつれ、大熊座がますます下に降りてきて（北極星はすでにだいふ前に消えていた）、南十字星がますます高く輝いていた。6月10日ごろ、ブラジルの海岸が見えた。ポン・ヂ・アスーカルと呼ばれる岩がリオデジャネイロ湾への入り口を示しており、すぐにリオデジャネイロの錨地に投錨した。

なんと素晴らしい地域だろう。四方を閉ざされていながらも、広々とした湾を緑の山が囲み、その頂にはコルコバードの丘があり、その麓には町が広がっている。6月は南半球では冬の月だが、しかし南回帰線上の冬は実に驚くべきものだ。昼は日陰でだいたい20度、夜は14度から16度だ。雷雨は頻繁にあるが、しかしだいたい晴れて穏やかな天候だ。入り江の水は昼間は青緑色で、夜は白く光り、岸边や山は豊かに生い茂った緑に包まれている。街中や波止場にはワイシャツを着た半裸の黒人がいて、彼らの肌の黒さの程度は褐色から艶のある黒色までさまざまだった。またブラジル人たちは黒いフロックコートを着て、シルクハットを被っていた。市場には無数のオレンジやミカンが売られていたほか、猿やオウムまでいた。新世界、南半球、6月の熱帯の冬。みんなロシアとは大違いだ。

仲間たち、特に I.P.アンドレーエフとはリオ近郊の森や山をたくさんぶらつき、一昼夜で30-40露里〔約32-42km〕散策し、見事な自然と景色を楽しんだものだ。何度かチジュカの滝に行き、コルコバードやガベアの丘に登った。あるとき、われわれのグループが道に迷って森の中で一晩過ごさなければならなくなったが、しかし危険はなかった。街の近郊には獣たちが生息していなかったのである。わたしはまた、円柱のように背の高いまっすぐのびたヤ

7 赤道を初めて通過する者が、海水を浴びる通過儀礼を行うという一種の儀式を指す。

シの木が並ぶ見事な並木道のある植物園に行くのも好きだった。そこには土着の植物だけでなく、チョウジやシナモンの木、クスノキなどアジアの直物もあり、その庭の多種多様な見事な木々を眺めながら感激したものだ。そこでは昼には小さなハチドリや大きな蝶々が飛び回り、夜には光る虫が空中を漂っていた。

われわれは2日ほどペトロポリスに行ってきた。そこはブラジルの皇帝の滞在地であり、山の中に位置する。そこでわれわれはイタマラチの滝まで散歩したが、それは素晴らしかった。その滝の周りの森にはまるで木のような非常に背の高いシダが生えていた。さらに、リオの近くの驚くほど長く暗い竹の並木道も忘れられない。それは竹が上の方で結ばれてできたゴシックのアーチのようであった。リオデジャネイロに滞在したのは全部で約4ヶ月だったが、それは次のような理由による。われわれはそこに2週間ほど滞在した後リオを出ようとし、ホーン岬の方に向かって南に出た。サンタカタリナ島の緯度のところで強いパンペロ（リオデプラタの海岸付近でしばしば起こる嵐がこう呼ばれる）が吹いた。風はとても強く、波のうねりも巨大だったが、しかし船長は今回はなぜかクリッパー船の帆を張ったままにした。船尾が持ち上がるたびにむき出しになったスクリューがひどい振動を起こし、そしてほどなくして船にかなりの水漏れが発生したことが分かった。航海を続けるのは不可能で、リオデジャネイロに戻り、修理のためにドックに入らなければならなくなった。長い世界一周航海にはクリッパー船がもちそうにないという報告がロシアに送られた。その報告はかなり誇張されていた。例えば、パンペロの記述では、甲板がピアノの鍵盤のようにぐらぐらとしていたと書かれた。実際にはそんなことはなかった。ただ帆を張って、揺れでむき出しになったスクリューの振動で船尾をぐらぐらさせるべきではなかったのだ。それ以前にわれわれが体験した嵐はすべて、小さな帆でごく普通に無事に持ちこたえることができたのである。いずれにしても、修理しなければならなかった。その作業のため、われわれは10月まで、つまり世界一周航海を延期

して、ヨーロッパに戻るようという指示がロシアから来るまで、リオに居残ることになった（ついでに言うと、船長は喜んでいた）。

水漏れの修理作業を終え、ヨーロッパに戻る正式な指示を受けるまで、クリッパー船は数日間リオデジャネイロを出て、そこから南方に少し行ったところにある小さなイーリャグランデ島の方に行った。砲撃教練を行うためである。そしてイーリャグランデのそばに 5-6 日ほど滞在した。これは山がちな小島であり、鬱蒼とした熱帯雨林でおおわれている。島の片側には砂糖とコーヒーのプランテーションがある。われわれはその見事な森をたくさん散歩した。イーリャグランデからリオデジャネイロに戻ってからすぐに、指示が届いた。もうすでに 10 月になっていた。夏が始まり、暑さが強まっていった。わたしはやや名残惜しくリオとその見事な自然を後にした。

クリッパー船は〔スペインの〕カディスに向かった。そこで次の指令を待つことになっていたのだ。北半球に戻るのには 60 から 65 日ほどかかった。再び魅惑の貿易風帯があり、行きとは逆に、北半球の星たちが現れ、南の星は消えて行った。赤道のこちら側のどこかで二晩続けて海が尋常ならざる燐光を発しているのを見た。われわれはおそらくいわゆるサルガッソ海に入ったのだろう。そこはつまり海藻や軟体動物がたくさんおり、海の燐光を特に強める海域なのである。かなり強い貿易風が吹き、海はうねっていた。船から水平線に至るまで海面全体が燐光に満ち、帆にも反射していた。実際に見てみなければ、こんな美しい光景を想像することはできないだろう。3 日目の夜は海の発光は弱くなり、海は普通の夜の光景に戻った。

カディスに到着したのは、たしか 12 月の初頭だった。3 日ほど滞在し、そこで受け取った指示に従って、地中海に出た。そこではヴィッラ・フランカでレソフスキーの艦隊に入るようになっていた。その艦隊は今では亡き皇太子ニコライ・アレクサンドロヴィチ公のもので、皇太子はこの冬病気でニースに滞在していた⁸。途中でわれわれはジブラルタルに立ち寄り、そこで防衛施

⁸ ニコライ・アレクサンドロヴィチ皇太子は 1865 年の年明けまでは健康だったが、南欧旅行の最中に調子を崩す。その後、旅行を続けたが、イタリア

設のある有名な岩を見学し、さらにメノルカ島のマオー港にも行った。熱帯の暖かさに別れを告げて久しかったが、それでも天候は、涼しかったものの、素晴らしいものだった。12月末に着いたヴィッラ・フランカでも同じような天候に恵まれた。

ヴィッラ・フランカでレソフスキーの艦隊を見つけ、そこに合流した。ヴィッラ・フランカ停泊中は、トゥーロンやジェノヴァ、ラ・スペツィアなどへのちょっとした航海があり、変化に富んでいた。トゥーロンにいたときわたしはマルセイユを訪れ、ジェノヴァからは名高いヴィッラ・パツラヴィチニに行ってきた。勤めない日にはニースまで気持ちよく散歩をして時間を過ごしたものだ。I.P.アンドレーエフと一緒に山に散歩に出かけることもあった。美しい岩がちの山、オリーブやオレンジの木々、そして素晴らしい海は、とても印象に残っている。悪名高いモナコにも行くことがあった。そこにはヴィッラ・フランカから《ブルドック》という名の汽船が出ているのだが、それは異常なほど揺れがひどく、海の揺れに慣れているわたしでさえ、モナコに行くときに船酔いしてしまったほどだ。わたしはルーレットをやってみたが、金貨何枚か負けてしまい、そこでやめた。というのも、その遊びに何の面白さも感じなかったからである。ニースではその当時イタリア・オペラをやっていたが、そこには行かなかった。音楽好きの仲間たちと陸に上がる時には、わたしはニューヨークにいたときに聴いたグノーの《ファウスト》をピアノで弾いた。《ファウスト》はその頃人気が出始めていたのだ。わたしはどこかでピアノ編曲版を手に入れていた。聴き手は感動していた。正直に言うと、わたし自身もその曲が気に入っていた。

わたしと仲間たちは当時すでに海軍少尉、つまり本物の士官に任官しており⁹、士官部屋に入っていた。

に入国した時に病状が急変。倒れた皇太子は南フランスに運び込まれたが、病状は回復せず、1865年の4月にニースで客死した。
 9 底本の注釈によると、リムスキー＝コルサコフが海軍少尉に任官したのは、1864年6月30日付の辞令による。

4月に皇太子が逝去された。皇太子のご遺体は盛大な儀式と共にフリゲート艦《アレクサンドル・ネフスキー号》に移され、われわれの大艦隊全体がロシアへと向かった。われわれは〔イギリスの〕プリマスと〔ノルウェーの〕クリスチャンサンに立ち寄った。4月のノルウェーは暖かく、緑は美しい盛りだった。わたしはクリスチャンサンから綺麗な滝に行ってきた。その名前は覚えていない。フィンランド湾に近づくにつれてどんどんと寒くなっていき、湾では氷塊に出会ったほどだ。4月下旬にはわれわれはクロンシュタットの錨地に錨を下した。

わたしの外国航海は終わった。遠い国々や遠い海の魅惑の自然について忘れがたい思い出がたくさんある。一方、2年8か月続いた航海によって、海上勤務の低俗でがさつ、不快な印象が残った。音楽やわたしの音楽熱については何が言えよう。音楽のことは忘れ、芸術活動への関心も弱まってしまった。母や兄の家族、そしてバラキレフと会い、彼らが夏の間ペテルブルクからすぐに散り散りになったあと、クリッパー船の艀装解除のためにクロンシュタットで夏を過ごし、知り合いの士官 K.E.ザンブルジツキーの家に住んでいたのだが、そこにピアノがあっても、わたしはまったく音楽に触れようとしなかったほど、音楽熱は冷めてしまっていたのだ。知り合いの素人の船乗りがときどきわたしのところにヴァイオリンをもってやってきて、一緒にソナタを演奏することがあったが、そんなのは音楽をやっているとは言えない。わたし自身素人の将校となり、時には喜んで音楽を演奏したり聴いたりするが、芸術活動についての夢はまったく消え去ってしまい、その消え去った夢もまったく残念にも感じなかった。

第6章 1865—1866年

音楽に戻る。A.P.ボロディンとの出会い。わたしの第1交響曲。M.A.バラキレフとそのグループのメンバー。第1交響曲初演。グループの音楽活動。ロシアの主題による序曲。わたしの最初のロマンス。

1865年9月、クリッパー船《アルマーズ号》の艀装解除が終わると、わたしはクリッパー船の乗組員が属していた第1艦隊乗組員の一部とともにペテルブルグに移された。こうしてわたしの地上勤務とペテルブルグの生活が始まったのだった。

兄とその家族、わたしの母は夏が終わるとペテルブルグに戻ってきた。バラキレフ、キューイー、ムソルグスキーといった音楽関係の友人たちも集まってきた。わたしはバラキレフのもとを訪れるようになり、またはじめから音楽に慣れ親しみ、熱中するようになった。外国に行っている間に、随分たくさん年月が経ち、音楽界に新しいことがたくさん起こったものだ。無料音楽学校が創設された¹⁰。バラキレフはG.I.ロマーキン¹¹と共にその学校の演奏会の指揮者になった。マリインスキー劇場の舞台では《ユディト》が上演され¹²、その作者セロフが作曲家として表舞台に登場していた。フィルハーモニー協会の招きでリヒャルト・ヴァーグナーがやってきて、ペテルブルグの音楽界に自作を披露し、自分で指揮をしてオーケストラの模範的な演奏を示した¹³。ヴァーグナーに倣って、そのときから指揮者はみな聴衆に背を向け、オーケストラが自分の目の前になる向きに立つようになったのである。

10 無料音楽学校の設立は1862年3月18日。

11 ガヴリイル・イオアキモヴィチ・ロマーキン（Гавриил Иоакимович Ломакин, 1812—1885）。ロシアの合唱指揮者、指導者、作曲家。バラキレフと共に1862年にペテルブルグに無料音楽学校を創設。

12 底本の注によると、1863年5月16日のこと。

13 底本の注によると、ヴァーグナーの指揮によるフィルハーモニー協会の演

バラキレフのところに通い始めたころ、グループに前途有望な新しいメンバーが入ったことを聞いた。それは A.P.ボロディンだった¹⁴。わたしがペテルブルグに移ってからしばらくの間、ボロディンはそこにはおらず、夏が終わってもまだ戻らなかった。バラキレフはわたしにボロディンの変ホ長調の交響曲の第1楽章の断片を演奏してくれたが、わたしは気に入ったというより、むしろ驚かされた。ボロディンはほどなくしてペテルブルグに戻ってきて、わたしたちは知り合った。ボロディンの方が10歳ほど年上だったが、その時からわれわれの友情は始まったのである。ボロディンの妻エカテリーナ・セルゲエヴナとも知り合った。ボロディンはすでにその当時医学アカデミーの化学の教授であり、リテイヌィー橋の近くのアカデミーの建物に住み、その後も亡くなるまで同じ部屋に住み続けた。ボロディンは、バラキレフとムソルグスキーが連弾で弾いたわたしの交響曲を気に入ってくれた。ボロディンの交響曲第1楽章変ホ長調はまだ完成していなかったが、残りの楽章の素材は夏に外国で作られたものがすでにあつた。わたしはその断片に感激した。また、第1楽章も初めて聴いたときは驚いただけだったが、それも理解できた。ボロディンのところによく行くようになり、泊まることもあつた。音楽についてたくさん語り合った。ボロディンはわたしに構想段階のものを弾いてくれたり、交響曲のスケッチを見せてくれたりした。ボロディンはチェロやオーボエ、フルートを演奏していたから、オーケストレーションの実践的な部分に関してはわたしよりもよく分かつていた。ボロディンは非常に心優しく、教養があり、話しやすく、独特なウィットに富んだ会話をする人だった。ボロディンのところに行くと、住居の併設されている実験室で仕事をしている

奏会は1863年2月に行われた。

14 アレクサンドル・ボルヴィリエヴィチ・ボロディン（Александр Порфирьевич Бородин, 1833–1887）。ロシアの作曲家。本職は化学者。交響曲、弦楽四重奏曲、オペラ、歌曲などの分野で特に傑出した作品を残した。底本の注に寄れば、ボロディンがバラキレフと知り合ったのは1862年の秋、ペテルブルグにおいてで、有名な医師ボトキン教授の家においてであった。

ことが多かった。何か無色の気体が入っているフラスコに向かい、管を使って片方のフラスコからもう一方へと無色の気体を移していたとき、わたしはボロディンにまるで何もしていないみたいだと言ってやった。仕事を終わると、ボロディンはわたしと自宅に戻り、そしてわれわれは音楽の演奏や議論を始めたりしたが、その最中にボロディンは実験室で何か焦げたり吹きこぼれたりしていないか見るために、跳びあがって実験室に駆けていくのだが、そのとき9度や7度の進行からなる驚くべきゼクエンツを廊下に響き渡らせながら走って行くのだった。そして、戻ってきてからわれわれは音楽や議論を再開するのだった。エカテリーナ・セルゲエヴナは素敵な教養ある女性で、名ピアニストでもあり、そして夫の才能を尊敬していた。

1865年秋わたしは所属していた第1艦隊乗組員の一部と共に、夏になるまでペテルブルグに転勤になった。われわれの班の場所はガレルナヤ港のいわゆる「デリャビン・ハウス」であった。わたしはヴァシーリー島第15号線の印刷工か植字工の家の家具付きの部屋に住んでいた。昼食は海軍兵学校の兄のところに通った。その頃家族とは一緒に住めなかった。兄の住居は大きかったのだが、空いている場所がなかったのである。仕事はそれほど面白くはなかった。毎朝2時間か3時間ほどデリャビン・ハウスの事務で過ごさなければならず、そこでは書類関係の事務の主任を務め、「閣下にご報告申し上げます」だとか「本状にリストを同封し、以下のようにお願い申し上げます」などで始まる報告書や公文書を走り書きしていた。

バラキレフのところはかなり頻繁に通った。夜にバラキレフの家に着いて、そのまま泊めてもらうこともたまにあった。ボロディンのところに行っていたことはすでに書いた通りだ。キューイのところにも行った。このうちの誰かのところでしばしばバラキレフ、キューイ、ムソルグスキー、ボロディン、V.V.スターツフといった音楽仲間が集まって、よく連弾したものだ。

バラキレフのたつての願いで、わたしはまた交響曲に取り組みだした。そのときまでなかったスケルツォのトリオを作り、またバラキレフの指示に従って、交響曲全体のオーケストレーションをやり直し、完全に書き換えたの

だった。バラキレフは当時無料音楽学校の演奏会を G.I.ローマキンと共に指揮していたのだが、わたしの交響曲をそこで演奏することに決め、そのパート譜を書くよう命じた。しかしこのスコアのなんとひどかったことか。このことは後で述べることにして、一つだけ言うておこう。わたしはあれこれと上っ面をかじっただけで、当時イロハも知らなかったのだ。それでも変ホ長調の交響曲はできており、演奏されることになった。演奏会は 12 月 19 日、議会ホールで開催されることになり、本番に先だってリハーサルが 2 回行われた（当時としては普通の回数である）。指揮の技術は当時わたしには未知の神秘だったから、その神秘を知っていたバラキレフに敬意を抱いていた。バラキレフが学校の合唱練習に行ったりすることや、その練習について、ローマキンについて、いろいろな音楽関連のことについて、そしてさまざまなペテルブルグの芸術家たちについて話してくれること——これらすべてはわたしにとって、何か神秘的な魅力に溢れていた。わたしはちょっとしたものを書いてはいたものの、何も知らず、満足に演奏することもできない海軍士官でしかないことを自覚していた。しかし、ここには音楽に関するさまざまな話や、いろいろな**本物の**芸術家たちについての話があり、それと共に、なんでも知っていて、なんでもでき、本物の音楽家として皆に尊敬されているバラキレフがいたのである。

キューイーは当時すでに（コルシュの）『サンクト・ペテルブルグ報知』¹⁵において批評活動を始めていたため、わたしはその作品を愛するだけでなく、本物の社会活動家としてキューイーに尊敬の念を抱かざるを得なかった。

ムソルグスキーとボロディンに関しては、わたしはバラキレフやキューイーのような先生としてではなく、むしろ仲間として見ていた。ボロディンの作品はまだ演奏されておらず、最初の大規模な作品である変ホ長調の交響曲の作曲が始まったばかりだった。自分でフルートやオーボエ、チェロを弾いて

15 底本の注によれば、1729 年 1 月 4 日から科学アカデミーによって発行されていた新聞『サンクト・ペテルブルグ報知』は 1863 年にヴァレンチン・コルシュが代表となり、進歩的な傾向を持つようになった。

いたから、楽器のことはわたしより良く分かっていたが、オーケストレーションに関してはわたしと同じくらい不慣れだった。ムソルグスキーに関しては、ピアニストとしての腕前は素晴らしく、歌手としても優秀で（もっとも当時すでに声は衰えていたが）、そして変ロ長調のスケルツォや《オイディプス王》の合唱という二つの小品がすでに A.G.ルビンシテインの指揮によって公に演奏されていたが¹⁶、それでもやはりオーケストレーションに関してはよく分かっていなかった。演奏されている曲はバラキレフが手を入れていたからである。一方、ムソルグスキーは音楽の専門家ではなく、どこかの省庁に勤めながら、ほんの片手間に音楽をやっていただけだった¹⁷。

ついでながら、ボロディンはわたしにムソルグスキーがまだ非常に若かった頃を覚えていると話してくれたことがある。ボロディンはどこか軍病院の当直医師で、ムソルグスキーはその同じ病院の当直将校だった（ムソルグスキーは当時まだ近衛隊に勤めていた）。そこで彼らは知り合ったのだ。その後すぐにボロディンは再び、共通の知り合いのところでムソルグスキーに出会った。ムソルグスキーはフランス語を流暢に話す若々しい将校で、《イル・トロヴァトーレ》〔ヴェルディ作曲のオペラ〕から何かを弾いてご婦人たちを喜ばせていた。こういう時代だからこそのことだ。

バラキレフとキューイーに関して述べておこう。二人は 60 年代にはムソルグスキーと大変近く、彼を心から愛し、年少者をかawaiiがるように接していたが、しかしムソルグスキーの才能は疑いようがないにもかかわらず、それにあまり期待はしていなかった。二人はムソルグスキーには何か足りないと感じたようで、特に助言や批評が必要だと思っていたのである。バラキレ

16 底本の注によると、ムソルグスキーのスケルツォ変ロ長調はロシア音楽協会の演奏会で A.G.ルビンシテインの指揮で 1860 年 1 月 11 日に演奏され、《オイディプス王》の合唱は K.N.リャードフの指揮によりマリインスキー劇場で 1861 年 4 月 6 日に演奏された。

17 底本の注によると、ムソルグスキーは 1863 年 12 月 1 日から 1867 年 4 月 26 日まで工科局に勤め、1868 年 12 月 1 日からは森林局に勤めた。

フはよくムソルグスキーのことを「頭が悪い」とか「頭が弱い」などと言っていた。

一方、キューイーとバラキレフの関係はこういう感じだった。バラキレフはキューイーは交響曲や形式に関してあまり理解できておらず、オーケストレーションに関してはまったくだめだが、声楽やオペラは大得意であると見なしていた。キューイーの方はバラキレフを交響曲と形式、オーケストレーションの大家であると見ていたが、しかしオペラや声楽全般をあまり好まないと見ていた。このように、彼らは互いに補完しあっていたのだが、しかし二人はそれぞれが自分なりに成熟した**大物**だと思っていた。そしてボロディンとムソルグスキー、わたしは未熟な**小物**であった。明らかに、バラキレフやキューイーに対するわれわれの態度もやや従属的なものであり、彼らの意見は無条件に聞き、記憶にとどめ、そして実行に移すのだった。反対に、バラキレフとキューイーは、実際にわれわれの意見など必要としていなかった。このように、わたしとボロディン、ムソルグスキーのお互いの関係はまったく仲間のようなものであり、バラキレフとキューイーに対しては生徒のように接していた。それだけでなく、すでに述べたように、個人的にわたしはバラキレフに敬意を抱き、バラキレフのことを自分のすべてであると思っていた。

リハーサルではわたしは軍のフロックコートを着ていたので団員たちにじろじろ見られたが、リハーサル自体うまくいき、その後演奏会が行われた。プログラムはモーツァルトの《レクイエム》とわたしの交響曲である。ついでながら、《レクイエム》ではメリニコフ兄弟がソリストとして歌った。I.A. メリニコフはそのときが初めての出演だったと思う。交響曲はうまくいった。わたしは舞台上に呼び出されたが、士官の恰好をしていたから、聴衆はかなり驚いたようだ。たくさんの人と知り合い、賛辞をもらった。もちろんわたしは幸せだった。演奏会の前ほとんど緊張しなかったことにも触れておいた方がいいだろう。作曲家としてあまり緊張しない傾向は生涯続いた。新聞紙上では、大絶賛というわけではないものの、好評だったように思う。キューイーは『ペテルブルグ報知』でとても好意的な評を書いてくれ、わたしの

ことをロシアで**最初**の交響曲を書いた者としたので（ルビンシテインが数に入れられていなかった）、わたしも自分がロシアの交響曲の作曲家達の中で一番先に書いたと信じたのだった。

わたしの交響曲が演奏されてほどなくして、無料音楽学校のメンバーたちの食事が開かれ、わたしも招待された。そこでわたしに乾杯の言葉が向けられた。

1866年春にわたしの交響曲は再び演奏されたが、このときはすでにバラキレフによるものではなかった。大斎の時は劇場では芝居はなく、劇場の管理部はオーケストラの演奏会を行っていた。はじめそれらはカルル・シューベルト（この人についてはすでに上で触れた）の指揮によって行われていた。彼が亡くなってからは、オペラ指揮者の K.N.リヤードフの手に移った。劇場管理部はわたしの交響曲も演奏したいと言ってきた。どうしてそうなったのかは分からない。おそらく、バラキレフが当時帝室劇場の音楽家たちの監督官だったコログリヴォフに働きかけたためだろう。わたしは管理部にスコアを渡し、リヤードフの指揮で演奏され、一応の成功を収めた。リハーサルにわたしは呼ばれなかった。明らかに、リヤードフも幹部もわたしのことなどほとんど気にかけていなかったのだ。演奏はけっして悪い出来ではなかったのだが、自分ではそれほど満足しなかった。第一にリハーサルに呼ばれなかったのがおもしろくなかったのと、第二にわたしにはバラキレフという唯一の神がいるのに、リヤードフに満足などできるはずがなかったのである。それに、バラキレフのグループでは、指揮者としてのリヤードフは、バラキレフ以外の他のあらゆる指揮者と同様、よく思われていなかったのだ。キューーなどは評論の中で、指揮者としてのバラキレフをヴァーグナーやベルリオーズと並べることもしばしばだった。ついであるが、当時キューーはまだベルリオーズを聞いたことがなかったのだが。バラキレフ自身は疑いなく自分が優れていて偉大であると信じていたが、本当のことを言わなければならない。当時指揮者の中でわれわれが知っていたのは、バラキレフ、A.G.ルビンシテインそしてリヤードフだけだったのだ。ルビンシテインはこの点では評判

が悪く、リャードフは自堕落な生活がたたって、すでに落ち目だった。いくら評判が良かったのは、カルル・シューベルトである。外国の指揮者に関しては、われわれは天才と見なされていた R.ヴァーグナーを除いて誰も知らなかった。このヴァーグナーと、そしてスターツフしか聴いたことのないベルリオーズ、この二人と並んで評価されたのがバラキレフだったのだ。ヴァーグナーもベルリーズもどちらもわたしは聴いたことがなかったものの、この二人に伍するとされたバラキレフの位置はわたしには疑いないものだった。こうして、劇場管理部の管弦楽演奏会でのわたしの交響曲の演奏に、わたしは満足する**はずがなかった**のである。それでも、わたしは何度か舞台に呼ばれたのを覚えている。

1866年の春がどのように過ぎ去ったかは思い出せない。ただ何も書かなかったことだけは覚えているが、どうして書かなかったのかは自分でも分からない。おそらく、当時わたしは技術がなかったために作曲が難しかったのと、もともと辛抱強いタイプでなかったせいだろう。バラキレフはわたしをせかすこともなく、勉強に駆り立てることもなかった。バラキレフ自身、時間の使われ方がよく分からない感じだったのである。わたしはバラキレフとよく夜を過ごした。当時バラキレフが自分で集めたロシア民謡に和声付けをして、長いことそれにかかりつきりになり、たくさん書き換えたりしていたのを覚えている。わたしはその場に居合わせていたので、バラキレフの集めた歌の素材とその和声化の方法をよく知ることができた。バラキレフは当時、カフカスに行ったときに覚えたたくさんの東洋の旋律と踊りのストックをもっていた。それをわたしや他の人たちに対して、素晴らしい和声とアレンジでよく弾いてみせてくれた。こうして当時ロシアや東洋の歌を知ったおかげで、わたしは民族音楽を愛するようになり、その後わたし自身もそれに身を捧げることになったのである。さらに、バラキレフにはハ長調の交響曲の書きかけがあったのを覚えている。交響曲の第1楽章の約3分の1はスコアの形で書かれていた。そのうえ、スケルツォ〔第2楽章〕と、さらにロシアの主題《パルタルラのシャルラタルラ》に基づくフィナーレ〔第4楽章〕のスケッチも存

CULTURE AND LANGUAGE No.79

在していた。この《パルタルラのシャルラタルラ》はわたしがバラキレフに教えたもので、わたし自身は叔父のピョートル・ペトロヴィチが歌ってくれて知ったのだった。フィナーレの第2主題は《われわれはキビを蒔いた》という歌で、バラキレフの40曲のロシア民謡集の中に収められているのとはほぼ同じ形で、ロ短調で書かれている。

スケルツォに関しては、バラキレフはあるときわたしの前でその出だしを即興で弾いてくれた；

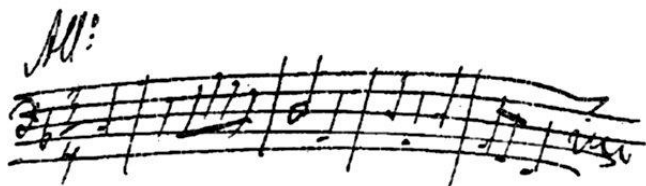


しかし、その後バラキレフはそれを別のもので変えた。ピアノ協奏曲は第1楽章ができていて、オーケストレーションもされていた。アダージオ〔第2楽章〕に関しては魅力的な構想があり、フィナーレ〔第3楽章〕も主題はできていた。

その後フィナーレの中間部では教会の主題《花婿が来る》が出てくるはずで、その主題を、鐘の音を模したピアノパートが伴奏するはずだった。そのほか、バラキレフにはピアノつきのへ長調の八重奏あるいは九重奏の書きかけもあった。



第1楽章は次のような主題をもつ：



そして魅力的なスケルツォ楽章もあった。バラキレフは自身で考案したオペラ《火の鳥》に対しては当時すでにいくぶん冷めていたが、それでも主に東洋の主題で書かれた優れた断片をたくさん弾いていた。優れていたのは、金のリンゴを守っているライオン、そして火の鳥の飛翔である。ペルシャの主題に基づいた歌いくつかと拝火教徒の礼拝も覚えている。



キューイは当時〔オペラ〕《ウィリアム・ラトクリフ》を作曲していた。わたしの間違いでなければ、「黒岩のそば」の場面〔第2幕第2場〕とメアリーのロマンス〔第1幕第1場〕はすでにできていた。ムソルグスキーは《サムボー》の筋でオペラを作曲していた。ときたまバラキレフとキューイのところでその断片を弾いていた。これらの断片は、その主題やアイディアが美しく、非常に高く評価されたが、その一方で、混乱しメチャクチャでひどく非難された部分もあった。MR.キューイ¹⁸はこのオペラの騒々しく無秩序な嵐のようなところがまったく我慢できなかったようだ。ボロディンは交響曲の

18 マリヴィナ・ラファイロヴナ・キューイ (Мальвина Рафаиловна Кюи, 1836-1899)。作曲家ツェーザリ・キューイの妻で声楽家。

作曲を続け、よくバラキレフのところにスコアの一部分を見てもらいに持っていった。

上に書いたことは当時のわたしの主な音楽的糧となっていた。相も変わらずバラキレフのところで夜を過ごし、キューイーやボロディンのところにもよく行った。しかしわたし自身は、上にも書いたように、1866年の春はほとんどあるいはまったく何も作曲せず、夏ごろになってようやくロシアの主題で序曲を書こうと思いついた。もちろん、バラキレフの《千年》¹⁹やロ短調の序曲がわたしにとって理想だった。わたしは《栄えあれ》、《門の前で》、《農民服を着たイヴァヌシユカ》という主題を選んだ。バラキレフは後者の2曲はやや単調だと言って、あまり賛同してくれなかったが、しかしわたしはなぜか自分の考えを押し通した。たぶん、この二つの主題で変奏曲やしゃれた和声を作ることができたので、今さらそれを捨てるのが嫌だったせいだろう。

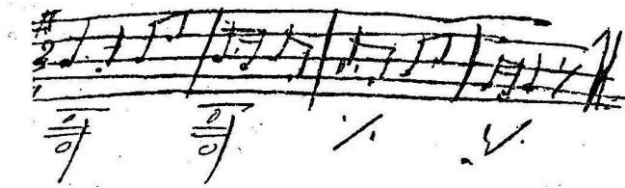
1866年の夏は主にペテルブルグで過ごした。ひと月だけヨット《ヴォルナー号》でフィンランドの小島群に航海に出ている。この短い航海から帰ってから、書きかけだった序曲を書き上げ、そのスコアは夏の終わりごろにできた。バラキレフがこの夏をどこで過ごしたか覚えていない。おそらく、クリンの父親のところだったろう²⁰。バラキレフは秋に戻ってきてから、二つの東洋の主題をよく弾くようになった。それは後にピアノのための幻想曲《イスラメイ》に使われることになるものである。変ニ長調の第1主題はカフカスで覚えたもので、ニ長調の第2主題はたしかこの夏にモスクワで誰か声楽家（たぶんニコラエフ）から聞いたものである²¹。それと同時にバラキレフはますます

19 もともと 1862年にルーシ建国 1000年の記念に交響詩《ルーシ》として構想されたが、その後《3つのロシアの主題による序曲第2番》として初演され、その後音画《千年》として出版された。

20 底本の注によれば、バラキレフは実際には 1866年の夏にプラハに行っていた。そこでグリーンカのオペラ《ルスランとリュドミラ》を上演するはずだったが、しかし普墺戦争勃発により帰国した。

21 底本の注によれば、バラキレフのピアノ曲《イスラメイ》の第1主題のも

す頻繁にオーケストラのための幻想曲《タマーラ》の主題を弾くようになった。アレグロの第1主題には、わたしたちが一緒にシュパレルナヤ通りにある陛下の護送隊の兵営を訪ねたときに耳にした旋律が使われた。今覚えているかぎりでは、東洋の人たちはバラライカかギターのような楽器で弾いていた。そのほか、彼らはグリンカの《ペルシャの合唱》を少し変えて合唱で歌っていた。



1866年と67年の間に《タマーラ》は大部分即興的に作られ、しばしばわたしや他の者がいる前で弾いてくれた。ほどなく少しずつ《イスラメイ》も形になり始めた。ハ長調の交響曲は他のあらゆる書きかけの曲と同じようにはかどっていなかった。

バラキレフ・グループ内で検討され、わたしたちのために主にバラキレフ自身によって演奏された外国の音楽の中で、1866年以降ますます取り上げられる機会が増えたのはリストの作品、特に《メフィストワルツ》と《死の舞踏》である。覚えている限りでは、《死の舞踏》は1865年か66年に、ルビンシテインの指揮で音楽院教授のゲルケによってロシア音楽協会の演奏会で初めて演奏された²²。バラキレフはこの曲に関するルビンシテインの意見をおぞ

とになったのは、北カフカスのカバルダ人の踊りの音楽（レズギンカに似ている）のメロディーであり、第2主題のもとになったのは、バラキレフがモスクワでボリショイ劇場の歌手、俳優のK.N.デ・ラザリ（芸名コンスタンチノフ）から聞いた抒情的なタタールの歌である。デ・ラザリとバラキレフが知り合ったのはチャイコフスキーのところだった。

²² 底本の注によると、この初演は1866年3月3日のことだった。

ましげに話してくれた。ルビンシテインはこの音楽をピアノの鍵盤が無秩序にカタカタ鳴っているようなものと言ったというのだ。ルビンシテインはリストを好んでいなかったが、それでも後にはこの作品にやや違った態度を取るようになった。《死の舞踏》はたしかわたしは初めて聴いたときには驚き、やや不快に感じたが、しかしすぐにこの曲を理解した。反対に、《メフィストワルツ》はこの上なく好きだった。スコアを手に入れて、自分の編曲で割とよく弾けるようにもなったくらいである。そもそもこの年はかなり熱心にピアノの練習をひとりで自分の家でやっていた。その当時たしか第 10 号線の家具付きの部屋に住んでいて、家賃は月に 10 ルーブルだった。わたしはチェルニーの《毎日の練習曲》を練習し、音階を 3 度やオクターヴで弾いたり、さらにショパンのエチュードもやった。これらの練習はバラキレフには内緒だった。バラキレフはけっしてわたしにピアノをやらせようとしなかったからだ（でもこれはどうしても必要だったのだ！）。バラキレフは随分前に、わたしにはピアニストの才能がないと決めつけていた。わたしの作品は大部分バラキレフ自身が演奏した。わたしと一緒に連弾をすることがあっても、わたしがつかえるとすぐに弾くのをやめ、後でムソルグスキーと一緒に弾いた方がいいと言うのだ。それでわたしはバラキレフに気兼ねするようになってしまい、バラキレフの前で弾くとたいい下手になってしまうのであった。これに関してはバラキレフには感謝できない。わたしはそれでも家でたくさん練習をして演奏がうまくなったと感じていたが、しかしバラキレフの前にすると、弾くのが怖く、バラキレフはわたしの上達をまったく認めることもなかったし、それだけでなく、他の人、特にキューイーからは「演奏に向かない人」と見なされていたのである。ああ、ひどい時代だった。わたしやボロディンのピアノ演奏のことを、グループのメンバーたちはよく笑いものにしたので、われわれは自分でも自信を無くしてしまったのだ。しかし、その当時わたしはまだ完全にはめげておらず、なんとか習得しようとひそかに頑張っていた。面白いことに、兄や他の知人の家など、バラキレフのグループの外では、わたしはピアノがうまいと思われていて、ご婦人方やお客さん

などの前で演奏するよう頼まれることもあり、わたしは演奏した。多くの人は良く分からないから感激してくれるのだが、それは結果として、欺瞞であり、愚かしいことだった。

仕事はあまり面白くなかった。ペテルブルグにある第8艦隊に配置換えになった。わたしの任務は、艦隊乗組員や「ニューホランド」と呼ばれる海軍省の倉庫の当直であった。刑務所の警備に任命されることもたまにあった。音楽生活の方は二つに分かれていた。その片方のバラキレフ・グループでは、わたしは作曲家として才能ある者と見なされ、ピアニストとしては下手かあるいはそもそもピアニストとは思われておらず、そして愛すべきおバカな士官という扱いだっただ。もう片方の知人やヴォイン・アンドレエヴィチの家族親類のグループの中では、わたしは海軍士官であり、ピアノが**すばらしく上手なディレッタント**であり、難しい音楽に通暁し、何やら作曲もしている人という扱いだっただ。日曜の夜は毎週兄のところに兄嫁の親戚や若者たちが集まっていたが、そこでわたしはダンスのために《美しきエレーヌ》〔ジャック・オッフエンバック作曲のオペレッタ〕や《マルタ〔またはリッチモンドの市場〕》から自分で作ったカドリールを弾いてやったり、ときには幕間にピアニストになり、絶妙なタッチでオペラの一節を弾いたりした。兄の友人P.I.ヴェリチュコフスキーのところではその娘たちと一緒に連弾をした。ヴェリチュコフスキーはチェロを弾き、彼のもとには知人のヴァイオリニストも来ていたので、わたしはヴァイオリンとヴィオラ、チェロ、ピアノ連弾のために《カマリンスカヤ》や《マドリードの夜》を編曲した。これらの業績についてバラキレフとそのグループはまったく知らなかった。わたしはこの自分の**ディレッタント**の活動を周到に隠していたからである。

わたしの序曲にバラキレフは満足してはいなかったものの、しかしいくつか修正し、指示を出して、無料音楽学校の演奏会で演奏してくれることになった。演奏会は1866年12月11日に行われた。わたしの序曲とともに、《メフィストワルツ》も演奏された。G.I.ロマーキンがリハーサルでこのワルツを聞いて、満足げに目を細め、わたしに「ミハイル・イヴァノヴィチ〔グリーン

カ] はこういう音楽が好きだったんだよなあ」と言ったのを覚えている。こ
ういう音楽とは何を意味したのだろう。おそらく、「心のこもった、官能的
な」音楽のことを言おうとしていたのだろう。《メフィストワルツ》にはグ
ループ全員、そしてもちろんわたしも感激した。バラキレフは天才的な指揮
者を自任しており、グループ全員もそう思っていた。わたしの序曲はうまく
いき、多少は受けが良かった。わたしは舞台上に呼ばれた。序曲はかなり華
やかに響き、打楽器のわたしの配置の仕方はセンスが良かったことを覚えて
いる。この序曲についての新聞の批評は覚えていない²³。

たしか 1866 年 12 月にわたしはハイネの詩で最初のロマンス《君の頬をわた
しの頬に重ねよ》を書いた²⁴。どうしてこの曲を書こうという気になったかは
覚えていない。わたしはバラキレフのロマンスに魅了されていたので、きっ
とそのバラキレフを真似ようと思ったのだろう。バラキレフはこの曲をかな
り褒めてくれた。しかし、ピアニストではないわたしが書くものだから仕方
がないのだが、伴奏が十分にピアニスティックでないとするや、最初から伴
奏に手を入れ、自分の手で書き換えたのだった。わたしのロマンスはこうし
てバラキレフによって伴奏を施された後に出版された。

23 この序曲は 1880 年春にリムスキー＝コルサコフ自身が手を入れ直し、ペリ
ヤーエフによって op.28 として出版された。

24 底本の注によれば、この記述は正しくない。最初のロマンスは現在残され
ていない《血は熱く》であり、この《君の頬をわたしの頬に重ねよ》は
1865 年 11 月の作である。